集団主義保育の主張

畑谷光代

とりわけ、むずかしいことを考えているわけでもないので、ここに〝集団主義保育〟という課題を示されて、ちょっと抵抗を感じております。というのは、子どもを、どのように大切に育てたらよいかという私の保育遍歴の終着駅が、この課題であるからです。ですから、子どもたちと取り組んできた一保母の手さぐりの結果得た〝幼児集団〟に関する問題提起として受けとってほしいと思います。

なお、私が所属している保育問題研究会でも、〝つたえあい保育〟（註、従来話しあい保育と言われていたが、一九六二年にこの名称を改めた。）という課題のもとに、幼児の集団とその保育方法について、ここ三、四年間、共同研究をつづけてまいりました。ですから、私の保育実践も、ここでの討議をくぐりぬけていることを申しそえておきます。

× × ×

一、集団と個の位置づけについて

◎家庭という〝集団〟は

生をうけてまず仲間入りする集団は家族であり、間接的に、すでに社会とのつながりをもつわけです。その家庭には、それぞれの歴史があり、経済的裏付けのちがい、親たちの考えちがいがあります。しかも、その子どもは、その家庭の質を選択する自由をもっていないのです。十人十色と申すように、それぞれの生活様式に育ち、性格や能力のちがいを背負って、次に参加するのが、幼児集団になるわけです。そして幼児教育の担い手である私たちの役割りが、ここからはじまります。

そこで、保育者として、今日の家庭を分析した場合、その家族の集団には、いろいろのタイプがあり、問題点を感じます。封建制の遺物がそのまま権威をもっている家庭、新旧の考えが対立し、にらみあっているか、或いは、すれちがっている家庭など、集団とは言えないかもしれません。また一方、古い伝統の中から、新しい歴史を創りだそうとする営みも、あらわれてきています。新しい家庭集団を築く課題が――。

とにかく、おとなたちと子どもたちの、年令タテ割りの集団構成

は、二つの困った傾向に陥りやすいのです。おとなの権威の押しつけか、または過保護的なあまやかしの傾向です。つまり、高姿勢と低姿勢の関係が存在しております。これらの家庭に育った幼児たちが、どのような性格形成を受けて、幼児集団の場に送りこまれてくるか――私たちは、いやおうなしに、この問題に取り組まなくてはなりません。ここに幼児教育の必要な課題が一つあります。さて、家族構成が理想に近い集団を形成しているとしても、社会人として発展する幼児の充実した経験を考えるなら、年令ヨコ割りの集団が必要でしょう。

◎最初に経験する幼児集団とは――

ひとりひとりの幼児が、家族間での位置づけや、育てられ方によって、この幼児集団の場を、どう受けとめるかは、やはり、十人十色でしょう。いわゆる〝勝手がちがう〟という実感であり、この実感は自分の家庭との比較によってあきらかになったわけです。

その内容は、〈すばらしく愉快だ〉〈なんて窮屈なところだ〉〈うかうかしてはいられない。おそろしいところだ〉〈うるさくてかなわない〉〈お母さんいけないって言ったことを、やってもいいんだな〉　これらは、集団第一歩に去来する幼児の独りごとを、ほんやくしてみたのです。このひとりひとりの感じ方、受けとめ方をたいせつにしながら、一つの集団として出発するのですが……ほんものの集団となる過程では、落伍者があればみんなで支え、妨害者があればみんなの力で抑え、協力しあう関係を知るなど、さまざまな人間関係を経験することでしょう。

みんなで一つの課題を考えあうという集団思考の場、そして、その考えあったことを、ひとりひとりの責任で解決していくという集団行動の場が、たえず設定され、関りあって、繰りかえされていきます。こうして烏合の集であったスタートの時点から、集団思考↓↑集団行動に至るまでの過程を、発達的におさえることが、集団を質的にたかめていく指導のめどになると考えます。つまり、自己中心性を社会化し、未分化性を分化していく指導ですが、その時に当然起るかっとうが、幼児の成長の一転機にしようと構えるわけです。保育所には幼稚園の任務に加えた社会的必要がかせられておりますが、幼児教育の場であるという点で、共通の問題を提起しているのです。そこで便宜的に幼児集団の場を借りるという考えから脱却し、ひとりひとりの幼児の可能性を発展させる必須条件として、この集団をほんものにしていきたいと願っている次第です。

ですから、個性尊重の立場から、集団の窮屈さを案じたり、或いは保育者の都合で、集団の枠を一方的に固定して、その中に幼児たちを追いこむという考え方を、私自身がくぐりぬけてきたことを自認しております。

この二通りの保育観が規定する集団のイメージは一つのものであり、私たちおとなが、今までの社会の中で経験してきた集団のイメージにつながるものと言えましょう。この旧い体験者のイメージで、幼児を左右することは、保育者の権利の乱用であるとさえ考

えます。そこで、保育者と幼児が構成する集団は、全く創造的なものでなくてはなりません。言いかえれば、幼児たちが、その集団の中で変革されると同時に、保育者も自己変革をしていく構えがなくてはなりません。

以上が、〝集団づくり〟についての必要性をのべましたが、この主張どおり実践の成果が得られているわけではありません。

とくにこの貧困な保育の条件では集団づくりの方法は、十把一からげになるおそれが多分になります。理想的な保育条件が許されるなら——例えば五歳児の受持人数が十五人〜二十人ぐらいなら——もっと実践的な答えをだせるのです。せめてできることは、保育者集団の集団思考⇅集団行動によって、子どもをたいせつにできる保育条件の改革に取り組むことです。

大きな問題にそれたようですが、これは、すりかえではなく、保育現場が民主化され、保育者が集団としての質を備えなければ、幼児集団をたかめていくことができないという大前提をのべたかったからです。

○集団の中で自分をどう位置づけるか

このことは、たいへんむずかしいことです。まず集団第一歩を現象面で、捉えると、集団に抵抗を感じ、集団の行動を掻き乱す幼児が目立ちます。けれど、こうしたタイプはそれだけ自我が強いので、集団の一員として位置づけられた時には、リーダー格になる可能性が多いのです。けれど、逆に泣いたり、わめいたりして集団を拒む子どももおります。これは、集団にすぐ順応する無抵抗のタイプより、やがては、集団に積極的に参加する事例が多いのです。こうしてみると、自我の強い子どもほど、集団の壁を感じ、自分勝手がとびだすと言えます。このように、自我が何らかの表現で要求する子どもの方が扱いよいとも言えます。それは歪んだ要求にせよ、伸ばすべきものにせよ——とにかく、ひとりひとりの要求を抽きだす指導が第一歩です。

この状態から集団が発足し、さまざまな要求がぶつかりあったり、すれちがったり、或いは特定な関係で結びついたり、また、強い要求が弱い要求を押しつぶしたりするわけです。

保育者はこの要求のもつれを、ときほぐしながら、その場で、その現実をみつめさせながら対等な人間関係へと指導してやります。自分以外の立場を考える必要のなかった幼児は、やがて集団の中で、自分は何をなすべきかを自覚する過程で、集団での安定感を得るのだと思います。

そして、Aの喜びもBの悲しみもみんなのものに反映されて、はじめて集団は、ほんものになったと言えます。このことが、個人をたいせつにする集団、集団をたいせつにする個人という関係であり、ひとりひとりが集団に位置づけられたと考えている中味です。

二、その方法として

集団づくりの根底になる考え方として〝つたえあいによる方法〟

が、実践の中で確認されてきました。

事例をあげられないことが残念ですが、その要点をあげてみますと——

つたえあいということは、一つの目標にむかって、どうしたらよいかを考えあい、協力しあう関係をつくることになります。言いかえれば、自分のありったけのチエと力を出しあって、援けあうために、このつたえあいが必要なのです。ですから、おざなりに相談の形式をとっても、ことは解決しません。

この話しあいは、行動にうつされ、さらにまた、話しあいで、結果をたしかめあうという繰りかえしが、彼らの集団での自覚をたかめていくのです。

その場合、保育者は、話しあいの方向づけをしてやる必要があります。脱線しないように、また、特定の子どもの発言に終らないような配慮です。そして原因・結果の判断に間違いが生じた時には、筋をとおしてやることが、この方向づけです。また、幼児期の特徴として、言語表現の不充分さ・ふたしかさを補ったり教える側面が用意されなくてはなりません。

やがて、保育者との結びつきを軸にした幼児集団は子ども同士のつながりに移行することになります。

以上が、つたえあいを基底においた集団づくりの方法であります。

三、集団意識を育てるための計画性

クラス集団の中に、数人の小グループを設定し、小集団における自分の位置にまず気づかせていきます。グループ意識は、当番を交替でするとか、グループ単位の行動を積み重ねるなどで日常的な経験から生れてきます。そしてだいじなことは、他のグループと比較することによって、自分の属している集団をますます自覚するわけです。もちろん、小ぜりあいもあるでしょう。弱肉強食もあらわれるでしょう。こうしたグループ内の矛盾を解決し、これをのり越えていけるような子どもにしたいのです。

けれど、この集団形成の内容は、年令で発達のちがいがあるわけですし、当然、年令別の年間計画がたてられなくてはなりません。この計画もここでのべる余裕がなくなってしまったのですが、保育者が、四月から三月にかけての集団の発展の見とおしをもった上で話しあいの内容を選択し、系統的な教材を配列していくことが、当面の課題となっております。

この主張は方法の具体性を添えられなかったという点で、片手落ちなのですが、集団主義保育を実践的に裏付けようとして、取り組んでいる一保母の問題提起にしたいと思います。

その意味では、改めて、幼児集団の内容をそれぞれの現場で検討しあわせて批判していただければありがたいことです。（豊川保育園）